

特 集

大学設置基準の大綱化と広島大学

はじめに

ご紹介いただきました田中隆莊と申します。私はこういうことは案外下手な方でございまして、自分のやってきた歴史の中で一番印象に残った所、そういう所をよく覚えておりました、どういふことでそのようなことになってきたのかというようなことには、あんまり関心を持たずに結果だけを大事にしてきました。そういう原因よりも結果の方をやってきた面が多分にございます。そういうことで、みなさんの歴史的な事実を残していこうということには、あまりうまくお応えできることがないんじゃないか、とこういう感じが致します。それでも母校でございますので、思い切っている話してみたいと思えますが、資料を探してみたんですが、あまりそういうものが残っていません。大変恐れ入りますが、ご質問があれば、その辺のことを答えられるかと思えます。

田 中 隆 莊

一、統合移転の決定と理学部の改革

この大学にとって一番大事な時に、私のような者がそこへ関わったような感じが致します。統合移転、これは学内の選挙の投票で決まったこととございますんで、理学部は反対でございましたが、それに従って動き始めた、こういうこととございます。都市の中に大学がない、都市の中でない大学というのは刺激が少なく、我々のような理学部的なことをやる上では、本通りに出ればちよつとヒントが出てくるような、そういう刺々しい気持ちで本通りの方を歩いたりする。それがいい結果を生んできとるといふような気が致しますので、それが西条の田舎の方へ行って果たしてどうかということで、学内で、学部内で随分議論しましたが、投票したら反対になつたんです。学内の一二組織からは、文学部と理学部だけが反対だったとのことです。そういうことで、多数決で決まったという感じが致します。

まあしかし、そうなれば理学部としてはどうするかという面で、當時は理学部の一員でございましたので、理学部をどう育てるかという

ことでございます。私が教授になったのが昭和四五（一九七〇）年頃だったと思いますが、理学部はちょうど人事のピークでございます。徐々に新しい教授の人を集めにゃいけないという時に、教授会に初めて出たような若造でございましたが、一学科の三分の二は外部の人にしようじゃないかという提案をしたんです。ですから三分の二は外部の人でやってもらうということでしたが、実際の実行は大分遅れまして、私が定年で辞める頃になってやっとそういうふうになった学科もでございます。生物の中では、動物と植物のそれぞれが実施したわけですが、結果が良かったかどうかはよくわかりません。ただ、外部から来た人は母校がありますので、母校からのこちらに対するサジェスチョン、こういったものが随分入ってきたように思います。誰々を送り込んでるんだから彼の所をこのようにやってくれ、というようなことも言ってきました、向こうの分家みたいなものだなあと思ってるんですが、やってみますと、任地がやはり自分の一番発展できる所だという形で、随分いい成績を上げられた方もございます。日本を代表するようないい成果も理学部の中より出ましたので、ああいった人事というのは、一〇〇%いいもんじゃありません、その中に一人か二人出ればそれでまた一時期を画する、そういう気持ちでやってきました。こういうことで、大学の改革という面は、そういう人事で当時はやらざるを得なかったと思います。

統合移転ということが、選挙みたいなことをやって決まったわけですが、理学部としては、同じ移るんなら新しいことをここで始めようじゃないかという気運がかなり横溢してきたような気が致します。で

すから、何といいますか、所が変われば気持ちも変わるなあ、という感じが致しまして、その当時随分いい論文がどんどん出たのを覚えております。ですから、ああいった刺激というのは、たえず大学には要るなということを感じていた時に統合移転が決まって、一学部だけが移転してその後は移転ができなくなったと、こういう時でございます。学部長になった時です。こんなことじゃいかんと思ひまして、何かこれを突破する方法はないかなと思つていた時に、たまたま私がやった研究の一つが国の特許になりました、諸外国から随分その特許を使わせてくれという情報がどんどん入ってきたんです。田舎に居ても世界から注意して見てくれるんならというんで、自信が湧きました。ですね、その自信を使つて各学科とも、そういうふうにやれるものならやってみてくれんかということをお願い続けたんです。そうするとやはり、全くやらないのはいけないからというんで、そういういい人材を外から取りいれるという風習ができたような気が致します。こういうことで、大学というのはやはりいい教官をどの学科もどの学部も集めるということが一番重要だと、こういう感じを、まあ昔からそうでございますが、その時初めて実験をしたような気が致します。

二、学長就任、統合移転の再開

そういう中で、移転がどんどん遅れてきたという時でございます。まあしかし、移転を推進するのは学長がやるべきことだから、まあ学部長ぐらいでそうまで考えんでもいいかなと思つた時に、学

長になれといわれることになりました(平成元(一九八九)年五月二一日学長就任)。で、早速何故これが遅れているのかということ、この辺が今からほとんど人には話してないことですが、いろいろ仕事をせざるを得なかったような気が致します。幸いにも広大を出た方が、政経学部を卒業した市役所の幹部がおられました、この方の所へ相談に行っただんです。本当の事を言ってくれんかと、西条に大学が逃げたことは変えることはできません、何とかして広島市に貢献をするようなことも我々は模索せにやあならんと。で、あなたの方で何かいい考えはないかと聞きましたら、彼は、一番大事な事が今遅れとるじゃないですか。何かいうて言ったら、統合移転するのに、移転が全然進んでないじゃないですか。そりゃ何かいいやり方があるんですかと聞きましたら、まあいろいろ話を聞いてみている内に、やはり県と市が一体になって政府に働きかけるということをやらざるを得ない、ということが分かりました。それで、当時の広島県知事(竹下虎之助)さんと広島市長(荒木武)さんに、私一応学長ですから相談に行きました。すると、大変好感を持たれました、お二人ともですね。それじゃあ荒木君、朝飯でも食べるか、と県知事さんが言われました。で、三人で朝飯会を構成したんです。これは朝七時半に、ちよつと飯とみそ汁とを食べるぐらゐの簡単なことですが、その当時のトップのホテル、全日空でございますが、あそこの一階の客間を使って、朝七時半に集まって八時二〇分まで雑談をして帰るんです。

その雑談の中で、どうやったら政府が金を出すかということを検討

しました。それはどういう結果になったかと申しますと、知事さんと市長さんがそれぞれ別々に大蔵省、文部省など関係機関に要望書を出そう、別々に出そう、ということが決まりました。それは知事と市長が持つて行こうと、それぞれ別持つて行こうということです。それから、持つて行く先に広島に関係のある官僚のいい方がおられたら、その方にも相談に行きなさいということになりました。この三つの条件を真つ先にやって下さったのが、当時の県知事さんでした。で、行かれた場所を聞きますと、あんまり言われんのだというんですが、まず自治省に行つておられますね。それから、政府の機関の中に郷土出身の幹部の方がおられ、そこを回つておられるんですね。それからその後、そのものずばりの大蔵省に入つて行つとられるんですね。私はそういうことは全く最初であり、前後にも全然そういうことは聞いたことがなかったのでどうしようか思つたんですが、やっぱり同じように、知事が行かれた後、市長が行かれた後、私がすぐ後を追うようにして回りました。

そうしたら不思議なことに、すぐ金が出ましたですね。ありや面白いことでございますね。それじゃあ再開しますかと文部省が言つて来ましたですね。もう待てんと言いましたら、順番を決めて持つてきなさいということになって、学内で投票みたいなことをやりながら順番を決めたように思います。思つた通りの順番になつたと思えます。そういう順番を決めて、それをやっぱり文部省へ報告に行きました。この間は、ほとんど東京へおる方が広島におるより長いぐらゐの東京暮らしでございます。学長に成り立てですから、理学部長時代は関係

のとこだけはよく知つとつたけれども他の所にはあんまり縁がなかったんですが、そうやって官僚の方達をずっと回って歩いて、本当、肝胆照らすような関係で人間関係を持つことができました。それでその中にやはり本当に広島のことを考えてくれる官僚の人がおられまして、そういう方が非常に努力して下さいました。それで来年の春までに、福山に生物生産学部がありましたがあれを移せ、今年度中にやりなさい、と言ってくれましてね。それで一気に進んだんですね。それが動き出しますと、他の学部も少しずつ動きが起りまして、順番を決めようということ順番を決めて、その後は順調に進んだと思います。

こういうことで、六年か七年ほど空白ができたんですね。これが何で起きたんかよく分かりませんが、結局、県と市がお金を出してくれないという、土地を買ってくれないという、そういうことだったんだと思いますね。それで最初に私が、ああこれだったんかと思つたのは、大蔵省と文部省が一緒になって、今の要望書が出たらすぐにですね、広大の学長もその中へ入れということで財務センター（国立学校財務センター）を創つたんですね。大蔵省が半分、文部省が半分出して組織を創つて、一人は広島のものというので私が入るんです。それで入つてやったんですが、実はその建物は借り物で文部省のすぐ裏の方にある小さい事務室でございました。そこで、これからの移転の順番を決めようじゃないかということになりました。第一は大阪大学の中之島にあった病院がございまして、あれを移すと。これは病院にとっちゃあ、あそこの方がずっと便利がいいんですが、最終的に文部省案として提案されました。それで、二番目は広大にしてくれと私が強く言い

ましたら、そうしましょうということになって、二番目に財務センターから出た金で移転ができるようになったということでございます。それ以後はよく知りませんが、担当、関連する大学の学長が評議員になって入って行くんですね、東大の人はずっと残るんですが。そういう形で次々と金沢とかいろんな所が移転していきまして、そのきつかけは、広島大学が一生懸命努力して、県知事さん、市長さんらを動かしてやったあれなんです。こんなことが当時、私の一つの考えとして残っております。

それで移転がようやく終わりがけですと、今度は大学を、一体となつた大学としてどうもつていくか、ということが皆さんの関心事になってまいりました。当然、従来通りのままじゃいかんだろうと、世間の風評などもそういうふうな新聞を見ると出ておりました。何とかして新しい方向を見つけて、この新天地で立派な大学に育てようじゃないかという気運が出たように思います。せつかく統合移転するんですから、やはり理想的なものを創るということで、私が一番最初に思つたのは、学部間の格差をなくすことだと、こう思いました。理学部、文部部は非常に古い歴史を持つておりますから、どうしても兄貴風を吹かす所がありましたから、そういうことは制度上では差はなくそうとする、ということ提案しました。そうしたら、皆さん賛成でございまして、実際実行する時には大分もめたと思いますが、学部間の格差をなくすことを目指すと。

それだつたらどういう大学像を描くべきかということがその次に出てまいりまして、皆さんに検討してもらいましたら、まあ学部の特性を

をそれぞれ伸ばすと、そういう中でやっぱり学部間の格差のないような研究・教育をやっていかにかあ、どうしてもその学部の特性化が笑い者になると、こういう雰囲気が出まして、まあ会議の中で、その辺のことがいろいろ論議されております。それで学部の特性化を図るといったら何かということですが、学問の方だと教養教育じゃないんだということとございまして、これは専門の学問を特性化して、全国に覇を唱えられるぐらいの研究を出す大学にもつていこうということとございまして。

もう一つは当時の総合科学部でございますが、総合科学部は教養教育も兼ねて負担をたくさん持っていました、かたや研究もやらにやらならんという学部でございました。学部間の格差をなくすためには、どうしてもこの教養教育を全学で担当していくことを考えにやいかんと、このように思ひまして、皆さんに提案したら案外、私の所まではそういうことに反対が出なかつたような気が致します。それで、そういう学部が揃っていくと、次第に教養というものが疎かになってくる。これじゃいかんというふうに思ひまして、教養教育を企画する組織だけは作ろうじゃないかということとそれを作って、各学部にそこで作られたものは修正はするけども、根本的な反対はしないようにしてくれと。それで案外スムーズに進んだような気が致します。ここにいらっしゃる牟田(泰三)先生(現副学長)など、その頃の若手でございまして、随分努力していただいたような気が致します。まあ各学部のそれを検討する、学部の特性化ということで、優秀な方が随分出てきておられました。私は本当にその時ほつと致しました。まあ学部を変えて再出

発するとしても、これなら大丈夫という気持ちで、全面的に各学部が競争して、いい学部を創るような体制を作るようにということと申しあげて、申しあげ続けたような気が致します。それで、教養教育をどうするかという問題が、その中から次第に出てまいりました。まあ、当時の総合科学部は教養教育を担当しておって、それでもう、それが一つの学問になつて、なつた人が随分おられたような気が致しますが、そういう人をどうするかという面もありましたが、結局は教養教育は全学部で担当すると。それで、教養教育に指名された方は、何くり言わずにそこでまた努力してもらいたいということと進んだような気が致します。

まあほぼそういうことが学内で同意が得られた頃に、学校教育学部の問題が出てまいりました。学校教育学部は教育学部と並んで併進しておつた学部でございますが、だんだんと学校そのものの児童が減ってくるということがありまして、何らかの処置をせにやらんというのが、文部省辺りからも私の所へよく資料が送られ始めました。で、この学校教育学部をどうするかということで、学校教育学部自ら考えてみてくれということと投げかけたわけです。学校教育学部では、やはり独立した学部にしたいということとございました。それが長く続きまして、私がおる間はどうにもならなくて、ただ、学校教育学部に修士課程の大学院だけは設置することができた。そういうことで、教育学部と学校教育学部の間がどうも繋がらないということとございました。で、その時はすでに学校教育学部と教育学部は移転の中に入る学部でございました。どういう設計をするかということが今度は逆

に問われるようになりました。私は別々のものではないかと、繋がつとる建物ならまあ仕方がないが、なるべく一体となった設計をするべきだと言っておったんですが、結局ならなくて、二つがこう繋がっただけになりました。まあ、それは良かったんです。それで良かったんですが、最近の情報からみますと、学校教育学部は教育学部に吸収していくということに、しかもそうなると教官定員を減らせというようなことがきとるようになっていますが、まあそれは致し方ない、学問の流れがそういう流れでございますので、致し方ないことじゃないかと思っております。

生物生産学部は、全学で移転計画をもう一度やり直す最初の学部でございました。初め頃に議論したし、それで生物生産学部へ予算を出そうというふうに財務センターから言ってきたもんですから、そのまま移しました。まだはつきり決まらない内にですね、生物生産学部が移りました。その移る条件として私は生物生産学部に、まだ皆さんが動かない中で最初に移るんだからいい学部にして移ってくれと言いました。それで、いい学部とはどんなことかというもんですから、先端科学技術を少なくとも三分の一ぐらいは含んだものでなくちゃいい学部じゃないとはつきりと申し渡したんです。まあ、人事を使ってそれを作っていくという形で進んできたんじゃないかと思えます。

この辺でいよいよ移転の順序を決める段階になりました。まあ大体決まっております、初めに教養部担当の総合科学部を移して、それを独立した学部にするということだから、まずこれを学内的に目に見えるような形で移したほうが良からうと、こう思っています、生物生産

学部を移した後、総合科学部の移転を決めてくれということで。そうしたらその時に、全学のを決めていこうという声が出まして、まあ、総合科学部が第二番目と。その次はどうするかというのを皆さんにもお任せしました。そうすると次々、教育学部、その次は文学部から学校教育学部もそれらと一緒にだつたですかね。それから法学部と、順次移転が進んだわけです。

それでその中で学内にいろんな施設を創らにゃいかんという声が出まして、その頃は次期学長をもう選ばにゃならん時期でございました。私は一期で辞めさしてもらおうということを早く表明しておつたわけです。というのは、順序を決めたり、それから特定の学部によくの費用を使っていくというようなことをやるには、どうしても依怙鼻頂というふうに考えますので、そうでなくて私はもう今度この四年が済んだら辞めて、皆さんでいい人を選びなさい、ということをやったわけですね。まあ、それは実行できたんですが、実際に皆さんの選考されたのは、確かに私は大成功だったような気が致します。移転というのの一つのセレモニーとお祭りでございます。ですから各学部が移転した時には必ずやっぱり何かお祝いをせにゃならん。私はそういうことが下手でございますので、そういうことにはあんまり関わらずにやっただんですが、移転するとみんなが同じ所に集まっただけじゃないかと、こういうことになりますので、全学が一緒になつて仕事をするようなものも次期学長さんにはやってもらいたいということを申し上げておつたんですが、ほんとによくやって下さつたような気が致します。今は、外部から見ても一つの塊になつた広島大学という感じを受

けております。これは現学長の大きな功績だと私は思っております。

三、文部省の仕事

その中で文部省の仕事も随分させられますんで、文部省の方に行つてやらにやらん仕事も随分ありました。その中で一番大きいのは、学術審議会というのがありますが、その中で、岡崎（基礎生物学研究所）とか三島（遺伝学研究所）とか方々にバラバラになっている生物系の研究所、これを何とかして一つに、あるいは二つぐらいにまとめられんかどうかという声が私の所へも伝わつて、ある組織を創つて、月に二回ぐらいはそれに行かにならん時期がありました。全然仕事は大学のことでありませんので、あんまり皆さんの了解が取れずに、休暇を取つて行つたりしました。今年になってやっとそれが完成しました。研究所が一体になって、同じ場所に集まつて、一体になってやると。それで、人員の余つた研究所というのは、外部へ出して、まあ大学的なものにして運営すると。研究所じゃないという形にするべきだということをやつと言ひ続けました。私の専門の分野は、特に頻繁に会議に呼び出されたんですが、三島に遺伝学研究所というのがあります、国立ですね。そこに運営協議員というのがありまして、研究所ができたらずぐそれに入れられたんですが、これは広大とは特別に関係ないままで、まだ四〇をやつと越えたぐらいの時からその運営協議会に出席けとつたんです。

もう一つは、名古屋のずつと北の方に、これは、何という町でしたっ

け、今は核融合研究所（核融合科学研究所）というのができてます。最近になって、大きな国際的な成果がそこで出ましたが、あの核融合研究所の評議員もしてくれということ、そつちはいきなり評議員で入りました。全く山を切り開くんだということです。そこへ行つて皆さんと議論するんですが、大変、私にとつちや楽しいことでした。よその研究所を創るんですから勝手なことを言えますんで、ずっとやつてましたが、それが一昨年完成しましてね。皆さん知つておられるんじゃないかと思いますが、核融合というのは、実際はエネルギーを吸収する、固めていく研究なんです。世界の研究所がそれに参加して、ヨーロッパはヨーロッパ、アメリカはアメリカでやつたんですが、日本は、日本一人でやらにやならない。当時は元氣も良かった日本ですから、まあ経済的に元氣が良かったんですが、よその国は入らん方がいいと、参与になる人二人ぐらい外国人を入れておりましたが、日本人だけでやろうということをやつたわけ。そうすると、長い時間かかりましたが、これが完成したのは三年前でございます。私も評議員をして、途中で学長が忙しくなつて辞めたんですが、やつぱり評議員の名前だけは残してくれとつたんですね。完成祝ひがありました、世界から数千人の研究者が来てました。ヨーロッパは成功しなかつたんですね。アメリカも失敗したんです。日本だけが核融合研究の機械装置を作るのに成功したんです。だからもう、世界的なニュースでございます。ところが日本の新聞はほとんど書いてなかつたですね。外国の新聞には、もう書き足りないぐらい、とつとつとつと書いてくんで、スペースがないぐらい。ですから外国人に乗つ取られ

たんじやないかという気がしました。しかしやっぱり、日本人だけの研究者で、数名の外国人を入れた研究所になっております。今は五七、八人の研究者がそこへ入って、新しい、いわゆる高エネルギーを出す研究をしております。原子爆弾のようにエネルギーが外部に放散しない、そういう研究所でございます。吸収する時のエネルギーですから、非常に人間のためにもいい研究です。広大にはその研究をやる方が三人ぐらいおられまして、その方は研究員として向こうへ行かれました。その一角を広大がその当時手伝ったということです。まあ、そういう時期がございまして、中四国に広大ありというのが知れ渡ったように思います。遺伝学研究所、岡崎にある生物学研究センター、それから今の岐阜県にできた核融合科学研究所、これがですね、私は大変広大のためにもなったんじやないかというような気が致します。というのは、広大の教官が三人か四人採用されて行かれましたですね。それから、岡崎にある生物の研究所、あそこにも生物系の方が、四、五人、組織替えた時に行かれました。広大卒の方でございますが、遺伝学研究所はもう前から行つとる人がおります。そういうことで、まあ私の本学の学長時代に、そういった側面もあつたいうことを、お知らせしておきたいと思ひます。

四、理論物理学研究所の廃止

その中で、逆の面もございまして、広島大学には、統合移転するんだったら、竹原にあつた理論物理学研究所、あそこをですね、文部省

と京都大学、京都大学には湯川さんの研究所（基礎物理学研究所）があります、それを拡大したいんだと。それのためには広大の研究所の方をもらいたいと初めは指名できたんですが、同じ取るんだったら全員取つてもらわにや絶対私は納得できないということで、文部省と湯川研究所の方達がこられて、二年ぐらいかかりましたが、割愛したわけです（一九九〇年六月八日廃止）。あそこに理論物理学研究所があつたという碑を残しただけでございます。そのかわり、あそこを整備をさせてもらうということを申しまして、生物生産学部の水産実験所みたいな形の大きなのができてますね。あれは、理論研との代替でございます。そういう形で創つたもんでございます。

京都大学へ行く先生方は全員で二六人ぐらのおられたんですが、その中の何人かはどうしても採らんというんですね。それならもう白紙撤回しようと言つたら、これは文部省としたらそれはならんというんで、結局、その九人の方を、九人だつたと思ひますが、向こうに採つてもらつたんです。ところが名譽教授にしてくれないんですね。こちらで長く働いたものを数えてくれない。それは困るよと、当時の学長だった人にねじこみに行つてきました。それで学長と議論したんですが、京都大学はそんな思慮のこまい大学かと言つたら、急に、まあ待つてくれ、そうまで言つてくれるな言つてね、結局全員してくれましたがね。まあ、あんな喧嘩もせにやならん。私は大体喧嘩が嫌いなんですがね。その日はそれで別れましたが。その後は京都大学はいろんな研究所を創りますが、あるいは祟つたんでしよう、広大からはどうしても採つてくれません。まあ、そういう嫌なことも大学間じゃ

あるものです。まあ学長というのは、皆さんにこういう時じゃないと話せないことも随分あるもんです。

幸い統合移転が済んで、いよいよこれから本当の大学の構築になるんじゃないかと思えます。移転する時にいろんな構想があったでしょうが、もう一度みんなでそれを読み直して、本格的な中四国を代表する大学を皆さんで創っていただきたいと、このように思います。本当に外部から評価される事項というのは、私思うのに、留学生が多いとかそんなもんじゃなしに、やっぱり各学部が独自の学問をもって、それをもって天下に号令をするという、そういう学部を、講座なら講座、先生なら先生、そういう人を作り上げていく、そういう大学じゃないと本当の学問を中心にする大学とは認められないと、こういう感じが致します。幸い今度こちらへ来られて、随分外部から先生方に来ていただきまして、私も顔も知らない先生も随分多いんですが、そういう先生方がお互い切磋琢磨して、あるいは協力して、ここでなけりやでない研究をどんどん出していただきたい、これは私の大きな願いでございます。そういう中でですね、人材も養成せにやいけません、学生ですね。これも大学の大きな一つの責任でございますから。

研究の方は人一人一人によってやり方が違うんで、あえて申しませんが、論理学の中に帰納法というものがあります。事実を正確につかんで、それが持つてくる事実の中にある規則性があればそれを法則性として出す。そうでなかったら事実を社会の人に知らせて、その事実がどういう意味を持つているかということを知らせる。これが本当のいわゆる演繹に対する相反する理論じゃないかと、このように思ってお

ります。演繹も時には使わにやなりません。私が書いた論文が、大体五〇〇近くあるんですが、その中の九五%ぐらいは帰納法でございます。事実を正確に書いて、それを記載して、表のようにして、そんなにもし何か規則性か何かあればそれを論文の中で示すということ、その規則性とか事実を使うのは、他の人に使ってもらう。それがまあ、私はずつとやってきた研究の方法論理でございました。しかし時には、これは演繹的にやった方が面白いなと思うのがございましたが。

五、子供時代のこと

実は私の恩師（下斗米直昌氏）が東大を出られて、広島島の文理科大学に來られて、その先生が來られたちに中国新聞が出す中国文化賞を取られたんですね。それは中学校の後半でしたが、それを見て、この先生とここにわしゃあ行きたいと思いました。もともと私は田舎の農家の子でございますので、稲の穂がこう長くなつとると、それが不思議で不思議でしようがないんですね。だから虫除けをやつとるのを、何であれを殺さにやいけんのかな、ということをやつとる農家の人に聞いたりして、いろいろやって、子供ながら自然の中の不思議さに非常に関心の強い子供でございました。ある時に大雨が降って、川が大洪水になりましたね、洪水の中を家財道具がどんどん流れるんですね。それで、その時に、学校からの帰りのちょうど五年生でしたが、危険な場所を見に大人が出とつたんですね。それで、ここを飛び込むような者は誰もおらんあというのが私の耳に入ったんです。それですぐ近くに農

家があつて、浮き袋を貸してくれと言つて、その浮き袋一つ持つてね、みんなよう飛び込まんならわしが飛び込んでみたらと言つて飛び込んだんです。そしたらね、滝になつてましてね、水を巻き込みながら流れてますね。浮き輪持つつてもだめなんです。グーと巻き込まれるんです。しかしうまくそれに乗つてね、ずつと流れて帰るんですね。それであるところまで行つたら、こうなだらかになつて、広くなつた所があります、そこで大人連中が綱やら竿を持つてきて、つかまれ言うんです。しかしね、何よう自分で飛び込まなくせに、わしやあこつから泳いで流れるわ言つてね、ずつと浮き輪を持つて島まで流れて、小学校の近くまで流れて、小学校のところが上がったんです。それが有名になりましたね、私の祖父が村長だったんですが、その耳に入つたんですね。帰つたら呼びつけられましたね、無茶苦茶なことをしとるというて怒られたんです。もう一遍こういうことをしたら、六年生は他の学校へ行かせると、こう言われまして、こりやあ大変だなあと思つたんですが、やつぱり忘れてしまふんですね。もう一つ別のことをやつたもんですからね。

これは満蒙開拓団の少年の募集がありましたね、三学期の級長をもう一遍やらされとつた時でした。担任の先生が来られて、このクラスの中に次男坊以下が十何人いる、その十何人は満蒙開拓団に応募しろという演説みたいな話をされたんですね。それでみんな家に帰つて相談しろと言われたんですね。それで翌日、その担任の先生は何人行くかと聞かれたんですね。それで私は先生の考えとるんは違ふんじやないんかなあと思うんですが、同級生が二人手を挙げたんです。全

部で二六人しかいないのに、二人手を挙げたんです。それですぐ私、二人拳がいたら女子と同じクラスになるなと思つたんですね。それでつい頭に閃いて、その連中を引き留めることを話したんです。満蒙開拓団は寒い所だと、新聞などを見ると寒い所だというから米はできんと、そんな所へ行つて、米ができると先生は言われたが、あれは本当じゃないと。実際米はできないですね。それを子供ながら知つとるもんですから、つい先生に反論したんです。そうしたら、それが私の祖父は慶応生まれでございます、明治天皇の護衛兵をやらされた下級武士でございますが、村長だったんですが、村長の孫が赤だという。赤は何か分かりますので、家にかえて赤いうたら何かと聞いたら、今日はおじいさんに叱られるよと言われましてね。まあそんなとつもないこうあれをする子供でございました。

六、教養教育—広島市立大学の事例—

それで、話は元に戻りますが、広島大学が移転して、もとの旧制だった文理科大学、これはまあ日本じゃ天下を二つに分けた大学でございますが、この大学が、理学部と文学部になるわけですが、やはり、全国のトップクラスの学部にならにやあいけんなどということを思いまして、学部の教授会でも、時々外部からの人を三分の二にしよじやないかとよく皆さんに言いよつたわけでございます。実際にそれを実行した学科に数学科がございまして、外部から来られた方と内部から来られた方、お互いに切磋琢磨しておられるような気が致します。私の

持っていた講座も外部から来て下さいましたが、非常にユニークな研究をやっておられます。私には弟子がおっても、とてもあれだけのことはできない、できなかったと思っております。そのかわりその弟子共を何処へ出すかというのは、大変なことでした。まあ幸い、論文をほとんど書かしておったんで、論文があれば大体採ってくれるんで、広大学長終えて二年目ぐらいに全員就職させましたんで、まあこれでよかったかなと思うんですが。

大学の運営・経営、大学の将来、そういったものを考えると、本当に非常に夢は湧きますが、その夢というのはやはり、人が見るような夢じゃなくて、人がよく見ないような夢を自分で編み出して考えてみるという、そういうことが一番大事なんじゃないかという気が致します。皆さんは若手の人、院生等をお持ちでしょうが、是非、私が帰納法と演繹法というのを言っていたということをお伝え下さい。生物学は、これは地学もそうですが、まだ自然界の分かっていることをいろいろ分かっていく分野がたくさんあります。それをやるのに、やはり帰納法じゃないと分かりません。大部分のものはですね。ですからそういった学問論の中で論理学を使うということが、理学部の生物の中で大分広がったんですね。皆さんはもちろんマスターしとられることとてございましょうが、論理学がない学問というのは、私はあんまり述べたいとは思いません。学内では教養教育の所で習えるわけです。特に科学とか生活の論理というのは、たった二つしかございません。そういうことで、それを事例を示しながら教育をするとかかなり身に付くものでございます。一つよろしくお願い致します。

広大の将来については、いろいろとやらにやあらんことがございます。先ほどの学部の改革を通して特性化した学部を創ること、中でも総合科学部の、総合科学を学問として確立するということが私はどうしても当時からなかつたんですが、まあ、これは非常に難しい学問分野だと思いますが、是非総合科学部がいわゆる本来の論理を持つた学問芸術を確立する、論理を持った学部で成長してもらおう、もうなつておられるかもしれませんが、当時のことを思いますとこれは非常に難しいことだなと思っております。

もう一つは、教養教育をどうするかということとてございませう。これは、早くから私が理学部の中で言っていたんで、たぶん理学部の方が他学部にも言っていたのだと思いますが、教養教育の方を全学的にやってみようということでその制度を敷かれたよう、これには大変私が感謝します。ありがとうございます。ただ、教養教育というのは、内容が何かということが非常に重要でございます。本学のことはほとんど分かりませんので、広島市立大学の事例を申します。私は市立大学の創設に関わっておったものですから、どうしても市長からその責任を取ってくれというんで、市立大学の方へ責任者として行きました。その時にですね、私行く条件として一つ、市長の方から費用を出してもらいたいのがあると言いましたら、何か新しい研究でもやるんかと言われる。いやそうじゃなしに、学生のためにやるんだと。早くて三年ぐらい、遅ければ四年、できれば大学院のマスターぐらいから、教養教育というのをやってみないと。すると教養教育なら大学でもやれるんじゃないかと言うものですから、いやいや、外国に行つ

て恥をかかないような教養教育をやるということだから、やっぱり三年か四年は終わってからでないと言身に付かない。だからその時になったら、予算を付けてくれと言いましたら、初年度から付けてくれましたね。いろいろ説得して下さったようで、日本を代表するような教養教育に適した研究もやっておられる方を、五、六人来ていただくことになりました。一例を挙げますと、いわゆる科学史、ルネサンスの時に科学史はどういう形でスタートしたかということの専門家がおられます。その方に科学史をしっかり教えてもらいたい、学生は三年か四年生ですが院生も加わっていいということにしまして、それは単位を取ることにしておりますんで一つ頼むと言いましたら、どうしても行かせてもらおうと言つて来て下さいました。有名な方ですね。それからもう一人は、東大の医学部に長くおられて、人間の脳の研究から昆虫の研究などをやっておられる方。その方も喜んで来て下さいました。そういうことがどの分野でもありまして、六人集まったと思います。それを二年目から始めましたですね。やってみると聴衆が随分多ございましてね。学生は二年生までしかないのに、本当教室が溢れるほどなんです。よく見てみると社会人が聞きに来ているんですね。そこで社会人のためのものも入れなければと気がつきまして、文部省へ行つて、もう二つぐらい増やしたいということ、結局八ぐらいになつたと思います。それを今やっています。これは、私非常に大学の存在感と大学自身のレベルアップに役立ったような気が致します。それで、今ではもう習慣的になつて、夏休みになつたら必ずその方が来ておられます。私もそうでしたが、大学を卒業して外国に行つても、イギリ

スの歴史は全然知らんで大恥をかくし、今度はアメリカの方でまた大恥をかくということがありました。それが頭にあるもんですから、外国に行く前に日本の歴史だけは教養として身に付け、そして行かせております。

毎年四〇〇人前後卒業しますが、卒業生の中の三分の一は大学院進学でございまして、もう三分の二ぐらいは就職です。就職は非常に楽でございましてね、広島で受けた者はほとんど通りますね。東京でも、ほとんど通ります。そういうようなことで、案外いい子供が育つたなあと思います。これは何が原因かなと思うんですが、先生方は六十何人おられますが、同じスタイルの教育をしないでくれということ、これを全員集めてはつきり言つたんです。同じスタイルの研究、講義だけはせんようにしてくれ、自分のスタイルを作つてやって下さいということ。そのやり方はどんなにしてもいい、円形をつくるようにしてもいいし、あるいは向かい合わせの机で議論させながらやる。何でもいいから、従来通りの同じ方向へ向いて、黒板見ながら講義するのはしないでくれと申しましたが、そういう教育をやっておられます。これは、学生の評判は非常にいいようですね。先生方にはあんまり良くないようです。学生のためだからやってくれと言つております。それからもう一つは、学生が東京の一流企業やアメリカの企業にも通るわけですが、何故通るんだらうかなあと思いましたが、非常に語学の力がついてるんですね。これは市立大学を造る時に、四百何人の学生全員に行き渡る装置を付けてくれと言いましたら、市が潤沢だったんでしよう、一部屋に入れんから四部屋に分けて、その中で全部

が埋まるようにしましょうと。しかしそれは、四〇人なら四〇人じゃなしに、六〇人ぐらいのを用意しときましょうと。それで六〇人用意の部屋を作ってくれたんです。すると上級生達が行って、一緒にやってる。あるいは外部から、こっそり入ってやってる人もおる。そういうようなのには、あんまり文句を言うなど言ってるんですね。まあそういうことで、わりにこうルーズと言ったら悪いんですが、緩やかな規制をしておることが若い連中にとっては非常にいいような気が致します。

もう一つは、図書館を造る時のことです。たまたま、私は名古屋大学へ遺伝学の集中講義に行ってたんですね。その時に広大の元学長で名大の学長だった飯島(宗一)さんが、図書館を見てくれと言うんですね。そこで一緒に行きまして驚いたことに、五、六人が集まってお互いディスカッションするルームがある、図書館中にずーつとあるんですね。五、六人でセミナーみたいなことをどの部屋でもやってるんですね。あの空気を市立大学にも入れたいなあと思いました、同じものを造ったんです。そうしたらやっぱり市立大学でも同じですね。学生がそこへ入って、本を出して読み合わせたり、議論したりしていますね。そういう大学の装置といえますか、今の若者にあうような装置をつくらにやいけんのだなという気は致します。幸いこの図書館は私がいた時の設計でしたから、同じようなことを言ってるかも分かりませんが。

七、アメリカでの研究

いろんなことを申しましたが、私は三〇歳の時にアメリカに呼ばれてまして、実際二九歳の時です。二九歳の時にできたばかりの研究所に呼ばれました。蘭という花がありますね、蘭の花は生殖細胞がまだどういう形で花粉になつていくかというプロセスが解明されていなかった。木原均という小麦の研究で有名な方がおられますが、その方の紹介です。アメリカから染色体をきれいに出して、きちっとやれる研究者が欲しいというんだけど、自分の弟子であなたよりいいプレパレーションをやる人はいないから、あなたを紹介するから適当にあなたの思う通りに対応してくれという手紙を持って、アメリカの研究者が私の所にやってこられました。植物の生殖細胞ができるプロセスを私の目の前でやってみてくれんかと、自分習って帰りたいというわけです。木原先生は厳しい方なので、まじめに対応せにやいけんと思いつながら、こうやってやればできますよと、やってみせましたね。一時間半でできる技術を持ったもんですから。やってみせましたら、写真撮って帰るからもう一遍やってみてくれと言うもんですから、このプレパレート全部あなたが持ち帰られるようにしてあげるからと言ってスライドではりつけたもの渡したんですね。一ヶ月ぐらいたったら、新しい研究所をホノルルに創って熱帯植物の蘭を、第二次世界大戦で集められた欧米英の蘭の株を集めたわけです。これは、一株が日本では当時は一〇〇万円ぐらにするようなものばっかりでございますが、それが全部鉄砲の弾やら戦車になつてアメリカにわたつたんですね。

つまり、兵器のかわりに蘭をくれというてアメリカは集めたんですね。それをフロリダとホノルルとに分けて置いてとりまして、現在の生殖細胞にできるプロセスとかいろいろ科学的な分析はほとんど蘭はすんでいなかったものですか、それをやる人をホノルルでは五〇人、それからもう一つの大学には五〇人研究者が配置されてましてね。染色体だったらということで、私を指名してきたんです。で、何月何日まで旅費を出すから来いということで、ちょうど日本人はまだ、フルブライトなどでもない時代でした、若者はですね。そういうことで神戸から出ましてね。出る前に蘭を一つ見とかにやいけん思いましたね、武田長兵衛さんのもつという話を聞いたことがあるんですけど、その武田長兵衛さんに直接電話かけたらね、人に見せる為にもつとるんじゃないいうて怒られたんですが、ところであんだいつ発つかいいうから、明日発つんだと、それじゃ今日来なさいというてね、呼んでくれました。で、家で温室にあるのを見せてくれたんですが、カトレアという蘭ですね。葉が一枚か二枚しかない大きな蘭ですが、それを見せ下さいましてね。そして、まだ花がついてなかったんで咲いている時の写真を見せてくれました。それを見て蘭というのはこんなものかと思つて、初めてみたんですがね、それで、翌朝の船に乗つて、ホノルルに行つたんですが。

行つて三日目には、私は減数分裂の全シリーズを解明したんですね。それを写真にしました。研究室には五、六人の責任者いうんがおるんですね。ある事項を一人一つずつ担当しているんですが、それが近いものが集まつて、一つの責任者がおる。その責任者に、できたから見

に来てくれいうたら、驚きましたね。で、顕微鏡見せいうんで見せたら、みな顕微鏡から見えるもんだから、驚きまして、この研究所の業績第一号だと言つてくれたんです。で、すぐ、研究所長のとこ行つてくれと言ふもんですから、三日目でしたかね、二晩徹夜ですつとおつて撮らにやいけんもんですから、徹夜をしたんですがね。でその所長の所へ、その写真を持っていきましてね、所長の発言は日本にはない言葉でした。写真をみてね、何か英語でべらべら言うんです。これは、本研究室で最初の大きな業績だと、だからあなたにはカッパープライス(銅板賞)を送ると。それからもう一つは、もう一遍これと似たもん、別の蘭で作つてくれと。で、それができたら、二つとも持つて私のとこへ来てくれ、ということづけたんです。で、その次は、デンドロビウムはじめよつたんですね。その次にやつたんが、何とかいう、日本にはない蘭です。それでちよいどいいと思われるつぼみが見えたもんですから、そいつを使いました。やつてみたら、ちよいどやつぱり同じように出ましてね。で、その間二日休んでまた研究所出たもんですから、また徹夜して、写真撮つてみせましたら、これは本物だと、あなたにはこれから別の研究をやつてもらいたいと言ふんですね。もう染色体やらんでええんですかと聞いたたら、もうあなたの技術を教えてもらつたら誰でもできるから、他のことをやつてくれというんですね。いや、わしもう帰りたいんだと言つたんです。そしてら、一年はおつてくれ言うんですね。で、まあしょうがないから一年はおりましよう、そのかわり私の思うようにやらしてくれ、と言いましたら、うんあなたは面白いことを言う、あなたは日本語で思うよう

にやらしてくれと言うたけども、英語ではそれはフリーサイエンスと
言うんだと言いましたね。フリーサイエンス言うんですねあれ。自由
な科学という、やりたいことを何でもやってみるといいう、そういう意
味らしいですがね。で、フリーサイエンスでやってよろしいと言うん
です。それじゃ一日考えてもええかと聞いたたら、いや今すぐ答えろ言
われたので、それじゃ一年したら私を帰してもらいたいと条件を出し
て、それから、その一年の内にあと三百五十何日あるけれども、その
間、土・日であつてもいつでも自由にこの研究室を使わせてくれと。
で、そのやりたい対象は何かいとうと、今何百万円もするような蘭を集
めとるけれども、あれがいい親かどうかいのを査定してみたいと。
中には駄物、花はいいけども、子供としたら駄物になるかも分からん
けど、そりゃーやつぱり、ほんとの科学者がやるべきことじゃないか
と思うんで、評価をきちんとしてみたいと言ってみましたら、そりゃー
いい研究だと。だからあなたが思うようにやりなさいと言うてくれま
して、それをずつと一年間やり続けたわけです。まあそうして帰ろう
思うたら、アメリカ人というのはやつぱし、あのへんはよく考えるもん
だと思いましたね。あなたは三年おることになつたけど、あと二年ブ
ラス一年足して、あなたが日本へ帰つて誰でもいいからよこしてくれ。
そのかわりそれに私がやった技術です、減数分裂をやる技術ですが、
あれを教えて送ってくれんかと、それをトレーニンングしておくてく
れんかと、いうことですね。あとから考えりゃ、そこまで技術をトレー
ニンングするいうたら、私大変なことです。日本へ帰つて教えるという
んだから、まあいい思つて、じゃさうしよう言うて、その間にやり

ましたがね。

向こうの研究の発表の仕方というのは、私のができたいうたらすぐ、
一週間以内に短報を『Nature』に出すんですね。そこであなたがやつ
た蘭は駄物だということ公表するんです。『Nature』が受理したと
いう情報が来ますんで、来たら今度それを地域で発表する。で発表す
る時にゃー私が言わにゃーいけんのです。日本語だからできん思うけ
ど、ちゃんと通訳付けたんですね。で、それを聞きに来る人は二週間
の内ですからね。二週間の内にはアメリカやヨーロッパみな知らされ
てるんですね、園芸家とか呼んで。ですから、もうだーつときで、研
究所の横に大きな部屋があつたのはそれだつたんですね。そこで新発
見を発表する場なんです。で、その新発見をどういうふうに使つかい
うのは、来てる人が勝手に使わにゃいけんのです。特許になつてますか
ら、一番最初にそれを使う人が特許を今度使う権利があると、こうい
うやり方なんです。ですから、行って、私二週間目に発表させられ
て、日本語ですがね。そしたら、済んだ後すぐ、一人一分ずつ質問
を認めるんですね。どんどん質問するんです。で、それはこういうふ
うにやるもんだと教えたり、これは駄物だからだめだといつて教えた
り、ずつとしたんです。そういうことを、正しい情報をすぐ、一週間
か一〇日にも社会へ出してしまふんです。これはすごいですね。で、
いい研究が研究所から出たら、すぐそれをばあーつとやってしまふん
です。まあ時には日本人の中には時々おるんですが、あつちにも日本
人で成功した人がおりますが、同じ日本人だからいうんでね、あなた
に染色体みてもらつたいうことにして、これはええ親だと言つてくれ

いうんです。そういうのもやっぱりおりますね。そんなじゃが不思議なことにはね、まっ日本人同士だったからだと思えます。最近の向こうの二世、三世の方はそれはなくなりましたがね。

そういう研究所がいい結果を出すと、それをすぐ社会にどういうふうにして還元するかと、いうことがそれを公平に社会に使わせるとなると、今アメリカの方式はそうですね、行ってそこで勉強したらんともう分からないですね。で、勉強の質問もしてみないといけん、そのためには勉強もしたらにやいけんということ、その十分間ぐらいの内にはだだーつと聞き出すんですね。そういう形ですぐ社会にどう使えるかということが流れる、そういうシステムをちゃんとできてますね。まっそういうことで、アメリカの体験をお話し申し上げたわけです。

八、地域共同研究センター

それからもう一つ、地域共同研究センターというのが広大にもできましたが（平成七年四月一日設置）、これに取りかかったのは私の学長時代でございました。地域共同研究センターというのは是非つくりたいと思って、当時一番広島に近かった熊本大学に行って説明を聞きましたら、二人しか人が付けてなかったですね。一人はお手伝いの方で、一人は助教の人を付けてあるんです。地域の人が相談にきても、それをだれそれ先生のところへ行けということをたつた一人でできるんかなと思いましたね。で、その後も当分学内で議論してもらいながら、すぐには要求せんほうがいいかなと、もつと人数増やさないけんのもん

じやないかと思つて、ずっと遅らせてきました。皆さんは地団駄踏まれたと思いますが、実際に熊本の地域共同研究センターの人に聞きますと、私に分かることも聴きに來られるので困るんです、とのことでした。ですから、地域共同研究センターというのは、数名の人材を配置しないとすぐには使えないんじゃないかというイメージが私にはございます。広大は少し増やしておられるようですね。私はアメリカのポストンやホノルルにいたこともありましたが、ヨーロッパにもいろいろ行ってやってきましたが、先端科学技術というのは、講座の中から出てくるんじゃないかと思えますね。地域共同研究センターじゃあ、人材が少ないと思えます。

ただ、地域共同研究センターというのは別の使い方はあると思えますね。実は私が市立大学に行きだしにですね、東京から來られた生物系の先生が私の所にやって來られました、政府が募集する研究に応募したいといわれて來られたんですね。で、研究の内容見ると、非常にユニークで、こりや社会に貢献するなと思つて推薦したんです。そうしたらその方、一〇億円の研究費をもらわれたんですね。それを使って研究しよう思われたら、学内ではできないんです。それで、地域共同研究センターに近いようなもの（広島県先端技術共同研究センター）を県が創つたんですね。あれは今はどういう名前か知りませんが（広島県産業科学技術研究所）、当時は技術をエクステンションする組織のように聞いていました。で、あそこ行って所長さんに、ここを借らせて頂けませんかと聞きましたらね、学長さんが來られたんじやけーお貸ししますよと。でも、水がたくさんいる研究なんじやけどど

うかと聞いたたら、でも、水は一つしか使えませんか、手洗水のとこしかないんですね。これじゃー使えせんわ、水がいる研究ですよ。どんな研究ですか、いや、内容は言われんけど、これがうまくいったら、美容の面で、あるいは医学の面で非常に助かる研究なんだ。だから是非ここを貸してくれ、各部屋に少なくとも二つぐらいは蛇口を作っておいたらどうですかと言いましたら、あんたがどうしてもと言われるんなら、もし全部屋を使ってくれるんだしたら改造しましょうと言うてくれましたね。それで、やることになったんです。一五、六人の優秀な若い人集めて、あそこで研究をされて大きな成果が出ましたがね。まあ、地域共同研究というのは、大学が持つとつても、そういうふうなものに発展せにゃいけないんじゃないかという感じがしますね。学内にはそれに対するアドバイスする人がいっぱいいますんでね、技術だけを教える所じゃなくてね、貸事務所みたいなものがむしろええんじゃないかと思いますが。まあ余談でございませう。

九、独創的な研究

もう一件だけ、ちょっと申し上げます。今全国の国立大学は大きな改革の波が押し寄せておりますが、いわゆる個性を持った大学が国家としては欲しいわけでございます。独創的な運営をやつて、独創的な教育をやられて、独創的な研究を出していく、そういうことができる能力と規模が広大にはあるわけでございますので、是非独創的な学生を育てて下さい。そのためには独創的な先生にならにゃいかんい

うことが言われます。独創的とはなんかということでございますが、私が思いますのは、誰もやつてないことをやると言えば簡単でございますが、そうでなくてですね、自分がやろうとしてる途中には、いろんな壁がありますが、その壁を突破することをやり遂げられる、そういう研究者ということじゃなないかと思ひます。

私が一年生の植物の細胞を単細胞として何十年でも生かして増殖させるという技術を発明しました。そういう技術は、世界のどこにもなかったんです。私の自慢のようになって悪いんですが、それをやる時に、四、八〇〇回ぐらい実験をやつてみたんですが、遂に失敗のうに見えたんです。データだけはしっかり助手にカラーでとつてもらつとつたんです。最後にデータを捨てる時にですね、それをもういっぺん諦めるためにと思つて、夜遅くまで写真を見てたんですね。すると、中に二つほど普通と違うものがあるんですね。それも同じもんとして処理されてしまつてたんです。その二つをもう一遍やつてみてくれ、独立にして一つだけでやつてみてくれと言ひました。試験管をたくさん使ひます。やつてみましたら、やつぱり同じ物が次々々々その中でできるんですね。細胞の塊が三つか四つぐらいの小さいものになつて、ずーつと粉のようになってきてくるんですね。で、思った通りのものができましたね、で、それを二年間追試験をやるからもう一切門外に言わんといてくれということ、助手と二人でそれを継ぎ足して、継ぎ足していくわけです。で、一年半ぐらいたつてもそのまま増えるんですね。これは大成功だと思ひまして、今度はこれから、普通の植物をだしてみようと、そっちへかえましたらできたんですね。た

だ根っただけはできなかつたんですね。それで根と葉を一緒にした名前にしたんです。苗条原基という、苗条というのは、葉と茎を一緒にしておる時に苗条と言うんです。そのものものができた。ですから、あとは下へ栄養分の寒天をさしときゃ、根が出ますからね。

それができて学会で発表すると同時に論文をどっかへ発表させろということ、アメリカ式ですね。一流な日本の雑誌に頼んで、それにこれ出るだろうか言いましたら、二ヶ月ぐらい先の秋の学会頃に出ますよと言うてくれましたんで、すぐ、学会の追加応募をしましてですね。そうしたら、昼飯を食べる一つ前の講演になりますかええですか。言うから、それで発表しますと言って学会へ行つて一二時前に発表したんですね。そして暫くやってたら、皆さんが、こんなことはカルスいうので昔やったことじゃと言うて、バラバラバラ出て行かれるんですね。ああこの人達はまだ私より大分遅れているなと思つたんですね。それから今度は、残つた人が五、六人になってから、その五、六人中のトップの人が自分の弟子だったんですね。東大の当時助教授の人でした。私と同姓の田中先生というんですが、その先生が私のところへつかつかつと来られてね、君大きな発見になつたと言われまして、これはまず新聞に出さないよと、新聞に載つたらアメリカでは特許になる、日本でも近々それ特許になりますよと、だからそれへ出さないよと。で、その出す日を新聞社に聞いてみて、その日に社会に公表しなさいと。三面でやれといわれましたね。

その通りにやりましたらね、学会で発表した時の人達も含めて、広島駅から東千田の広大まで来るのに行列になつたというぐらい、日

本中から人が来ましたね。夕方で日が暮れるのに、まだ列に残つて見せてくれというんですね。小さい部屋でやつとつたから、誰も入れないんですね。で、それをガラス瓶の中に入れたいものをばーつと並べといた。これが三つの細胞できとると、一つの細胞できとるというのを教えましてね、これを四、五日おいといたらいくつかの細胞になつて、最後には無数の細胞、植物になるということを言いました。

そういうことでやりましたら、それを特許に使いたいという会社が随分来られました。実際今使つておられるのは五社ですね。その中で一番成功してるのが製紙会社ですね。大手の製紙会社の研究所がその手法を使つて、小さなこのぐらいの苗にして、熱帯地方に送り込むんですね。そうすると熱帯地方は繊維植物ですから、繊維植物として無数の植物ができるわけですね。一つの試験管から、半月ぐらいで数十万の細胞に分かれていきますから、それをまたその現地に行つて、大きな苗条原基になるような形にしといて、それを畑の中に入れて育てたら無数の繊維植物ができる。こういうのをやっております。そういうことになると、その会社は特許を取らせてもらいたいと言うんで、おたくのきまつた植物なら、もう勝手に取つて下さいというてやつてますが、基本的なところはこっちに特許費用をはらわにやいけません。

私に研究所を創れといわれて創つたところがこの学内にあります。植物遺伝子保管実験施設という名前、教授一人と助教一人と助手一人が付いてます。それらが盛んに今やつてくれていたでいております。主にやつとる植物というのが、中国の工業発展で絶滅していく植物がたくさんありますね。それを中国の科学院が持つてゐるわけです

ね。それをもらってきてこっちで大量増殖して向こうへ返してやると。それからもう一つは凍結保存してですね、凍結しとくと、まあ、永久保存になります。その両方をやっております。中国の科学院はどうしても下手なんです。虫が、カビがはいったとか言うんです。こちらで作ったものをほとんど無料で送ってやるんですね。そうすると喜んでね、農作物ですからこちらと非常にいい関係になっております。私も若い教授時代は、それをやって中国の省を回りました。遺伝子が欲しいものですから、有名な山へ入って植物を持ち帰りやるんですが、もう一つはね、何とかいう自治区になってるところがあるんですが、そこが入りにくいんですね。最近、研究所の所長の教授の方が、科学院に行ってそれを訴えたらね、これからはその地区に入らしてもらうということがどうやら決まったようです。研究というのは、非常に面白いですね。ああいうふうに展開致しますと、ほんと未開なことがどんどん分かっていきます。大変長いことお話ししましたが、まだ、残っていることもあるかと思えますので、ご質問があればいただき、お答えできるかと思えます。どうも長時間失礼しました。

(たなか りゅうそう・広島大学名誉教授、第七代広島大学長)

解説

本稿は、平成二二年七月二八日に広島大学高等教育研究開発センター授業研究開発室において行われた広島大学五十年史編集室主催第九回

研究会での講演を文章化したものである。

田中学長期は、一時期滞っていた統合移転が再開し、教育学部・理学部・総合科学部が東広島市へ移転した。田中氏は学長就任にあたって、統合移転の早期完了は最も重要な課題であると述べているが、『「広大フォーラム」二期二号、広島大学広報委員会、一九八九年』、本講演では、この移転事業が順調に進んだ背景として、広島県知事・広島市長との朝食会の開催と県・市ともに行った関係省庁への陳情について語られており、非常に興味深い。ただ、これらのできごとにも既に一〇年ほど前のことであり、生物生産学部の移転時期（沖原豊学長時代の昭和六三年に移転完了）を初めとして、学部の移転順番などに若干の齟齬がみられるが、あえてそれらを訂正することは行わなかった。本講演には、そうした点を差し引いても他では得られない貴重な情報が語られているためである。なお、事実関係については、末尾の関係年表を参照していただきたい。

田中学長期の平成三年六月には、大学設置基準が改正され、これを承けて広島大学では平成四年五月一九日の臨時評議会において、「大学設置基準等の改正に伴う広島大学の教育研究の整備と改善について（大綱）」が承認された。この「大綱」は、前文で「本学が、学術の中心として、高度な専門性を高めつつ、地方の雄として、特色ある教育及び研究を展開し得るよう、教官配置を含めて所要の整備と改善を行うことが必要である。」と謳い、「一、学部の教育の整備について」、「二、大学院の教育研究の整備充実について」、「三、自己点検・評価について」の三点について大綱を示している。以下に、本講演と関係

の深い部分を抄出しておく。

一、学部教育の整備について

(一) 教育課程の編成

一般教育科目等と専門教育科目の区分を取り払い、各学部が教育の理念と目的を明確にし、特色ある授業科目の設定及び教育課程の編成を行い、教養的教育と専門的教育を、全学年間に一貫的及び調和的に複合せせる。

(二) 教育課程の実施

教養的教育及び専門的教育は、本学の全教官が担当する。授業の担当と協力関係については、特別委員会の答申を尊重する。その際、可能な限り少人数教育化、コア・カリキュラム化を図る。

また、教育課程の相互乗り入れを進め、各学部が開講する授業科目を可能な限り全学に開放し、授業科目の重複を整理、統合する。

(三) 調整組織

教育課程の編成及び実施において、調整等が必要な場合には、既設の組織（教務委員会又はその拡大委員会、部長連絡会議等）において行うが、必要に応じて新たな組織で対応する。

(四) 実施時期

新しい教育課程が実施可能となった学部は、平成五年度から実施することとし、全学的には平成六年度から実施する。

二、大学院の教育研究の整備充実について

(一) 整備の目的

学問の中心として、国際的に通用する教育研究の場とする。このため、高度な専門性を持ち、拠点性を高め、特色ある教育研究を実施し得るよう、所要の整備を行う。

(二) 整備の方向性

基礎と応用と総合の各学問が共存し、調和のとれた大学院重点化を目指す。このため、各部局は、それぞれの理念に基づき、独自の教育研究の充実を期し、必要に応じて相互に協力し合う。さらに、国際的教育研究拠点として、各部局が協力する独自の研究科の設置を図る。

(三) 整備の方法

(中略)

(四) 関連整備事項

研究所、研究センター、研究施設等を新設整備し、さらに学外諸機関との教育研究協力機能、地域への情報発信機能等を整備し、情報交流機能の多様化を図る。

(下略)

この「大綱」については、田中氏自らが「広島大学Ⅱ専門深化と総合化の能力を併せ持つ大学」（有馬朗人・太田時男・塩野谷祐一編「国立大学ルネサンス―生まれ変わる「知」の拠点―」一、同文書院、一九九三年）において解説を加えているので参照していただきたい。新しい教育課程での教養教育が実施されたときには、田中氏は広島大

学を離れ広島市立大学長であったため、市立大学の教養教育について具体的に語っている。

本講演ではこれら大学の運営に関するもの他に、生物学への興味を持った子供時代から遺伝学者として大成するまでの歩みや研究論理、いわば研究者田中隆荘の「履歴書」が語られている。アメリカでの研究経験談は、日米の研究、特にその社会への公開のあり方の差違を如実に示している。より一層の「大学開放」が求められている現在の日本の大学にとつても参考にすべき点が多い。

最後になったが、貴重な講演をしていただいた田中隆荘氏に、改めてお礼申し上げる。

(菅 真城)

田中隆荘氏略歴および関連年表

大正14・8・20	広島県安佐郡安村字長楽寺(現広島市安佐南区長楽寺)に生まれる。		
昭和19・4・	広島高等師範学校理科第三部入学。		
22・3・	広島文理科大学生物学科入学。		
25・3・	広島文理科大学生物学科卒業。		
26・3・15	広島大学広島文理科大学助手。	56・5・21	教授頼實正弘が第六代広島大学長に任ぜられる。
28・4・1	広島大学理学部助手。	57・5・31	工学部が東広島市に移転を完了。
33・10・10	アメリカ合衆国へ出張(一年間)。	58・1・18	評議会が「学部等移転年次計画」を昭和六四年度移転完了に変更。
36・1・19	理学博士(広島大学広島文理科大学)。	59・6・20	国立遺伝学研究所運営協議員。
		昭和40・12・10	広島大学理学部講師。
		43・4・1	広島大学理学部助教教授。
		46・4・1	広島大学理学部教授。
		47・11・24	広島大学大学改革委員会委員(昭和47・3・31まで)評議会が広島大学の統合移転を決定。用地の決定については学長に一任。
		48・2・8	学長が賀茂郡西条町御菌宇地区に統合移転することを正式に決定・公表。
		52・3・29	賀茂学園都市における広島大学用地の整備について閣議了解。
		53・7・11	広島大学理学部附属植物遺伝子保管実験施設設置。同施設長(平成元年3月まで)。
			評議会が「学部等移転年次計画」(昭和六〇年度移転完了)を決定、工学部が最初の移転部局に決定。
			評議会が昭和五三年七月決定の「学部等移転年次計画」のうち、工学部および生物生産学部の移転時期を変更。

- | | | | |
|----------|---|---------|---|
| 昭和60・4・1 | 広島大学理学部長（平成元年3月まで）。 | 平成4・5・6 | 国立学校財務センター設置。 |
| 5・21 | 教授沖原豊が第七代広島大学長に任ぜられる。 | 6・28 | 国立遺伝学研究所評議員。 |
| 61・4・15 | 評議会が「学部等移転年次計画」を昭和六八年度移転完了に変更。 | 7・24 | 国立学校財務センター評議員。 |
| 63・3・31 | 生物生産学部が東広島市に移転を完了。 | 5・3・31 | 総合科学部が東広島市に移転を完了。 |
| 平成元・3・31 | 停年退官。 | 4・13 | 教養的教育に関して、人的および物的な諸条件等を全学的な観点から検討するために、教養的教育検討委員会を設置。 |
| 4・2 | 広島県立大学教授（5月17日まで）。 | 5・20 | 退官（任期满了）。 |
| 4・11 | 広島大学名誉教授。 | 5・21 | 教授原田康夫が第九代広島大学長に任ぜられる。 |
| 5・21 | 広島大学長。 | 12・21 | 広島市立大学設置。 |
| 9・1 | 核融合科学研究所評議員。 | 6・3・31 | 文学部が東広島市に移転を完了。 |
| 9・30 | 教育学部および教育学部福山分校が東広島市に移転を完了。 | 4・1 | 広島市立大学長（平成12年3月31日まで）。 |
| 2・4・16 | 大学入試センター評価委員。 | 7・3・31 | 学校教育学部、法学部、経済学部、附属図書館、大学教育研究センター、機器分析センターが東広島市に移転を完了。 |
| 5・15 | 評議会が昭和六一年四月決定の「学部等移転年次計画」を平成六年度移転完了に変更。 | 11・1 | 広島大学統合移転完了記念式典を行う。 |
| 6・8 | 理論物理学研究所を廃止（京都大学基礎物理学研究所に統合）。 | 8・12・31 | 学生部が東広島市に移転を完了。 |
| 3・3・31 | 生物生産学部附属水産実験所が竹原市の理論物理学研究所跡地に移転を完了。 | 9・1・31 | 事務局、附属学校部、広島大学調査室が東広島市に移転を完了。 |
| 4・25 | 中国科学院と国際交流協定締結。 | | |
| 5・1 | 大学設置・学校法人審議会委員。 | | |
| 9・30 | 理学部が一部の附属施設を除き東広島市に移転を完了。 | | |